

ノイローゼ気味に疼痛を訴えるが、切断患者など天気が悪くなるときによく無くなった足の幻覚痛を訴えることがある。

神山

結核療養の立場から長井先生いかがですか。

長井盛至：浩風園療養所

梅雨時は肺結核には極めて悪い。箱根の温泉群を総合調査したことがあったが、あの絶えず通り過ぎる濃霧は果していいといえようか。大島先生もいわれたように、空洞をつぶしたり、切除しても全部の病巣がとれたわけ

ではない。なおす力はやはり身体の抵抗力である。その意味で気候環境を考慮に入れた。自然療養をもう一度再検討してみる必要があろう。

緒方洪平：京都府立大

同感である。

神山

本日はどうもありがとうございました。今後もこのような会合を持ちたいと思います。

(要旨文責：神山恵三)

Jet Stream に伴う雲について

(附雲の写真募集)

第2次世界大戦以来、中緯度の偏西風というものは、環状に真直ぐに吹走するのではなく、波状にうねりながら地球をとりまわっていること、この偏西風の中のトロポポーズに近い高層には、特に風速の大きい部分(jet stream)があることなどが観測事実として大きく取上げられ、これ等の状態の変動と地上附近の天気推移とは密接な関係があることが明らかになって来た。すなわち、高層偏西風のトラフと呼ばれる、気流が北西から東南に南下し再び北上するうねり方が、低気圧の消長に影響を及ぼすこと、jetの下には地上附近のフロントがつきまとうという関係が、天気予報の重要な手がかりとなるばかりでなく、jetには航空機の飛行時間の短縮、燃料の節約等の利用面が考えられるようになって来た。例えば、本年1月9日には、全国的に寒波の襲来と共に、真日本一帯に大雪をもたらす、上越・信越線のダイヤを混乱せしめ、一方では沖縄から東京に向った飛行機が、この時のjetにぶつかって予定より3時間も早く到着したという悲喜こもごもの例がある。

このような次第で、上層の風を観測することが近代予報技術の重要な手段となって来たのであるが、従来の観測技術では晴雨にかかわらず1万メートル以上の風までもルーチンに観測することは不可能となり、レーダー方式による自動追跡の如き飛躍的な科学装置が採用されるようになった。

しかしながら、わが国のような細長い島国にあっては、観測網をいくら密にしても、上層風の一部分をかい間見るだけで、その大勢を綜観することは難しい。ところが、このような不幸な環境も、jetに伴う特徴ある雲を観測することによって、一部分補うことが出来るという便益がある。

jetに伴う雲の特徴は、(1)地平線から地平線に連らな

るような長い帯状をなすこと(大西洋では1,500マイルも長く伸びた例が観測されている)。(2)その形状は上層雲ではCcの中に波状組織がはっきり現われ、これからCiの流れて入り乱れた形になる；中層雲ではAcが薄ければ細胞構造が明瞭に現われ、厚ければjetの走向に直角な波状組織を呈し、レンズ状のAcならば幾層にも重って現われる。下層雲ではScが現われることがあるけれども、それは稀にしか見られない——という特有の形態を持っている。jet雲の現われる領域は、jetの両側およそ400マイルであるが、どちらかといえばjetの南側では、その範囲が広く、現われる頻度も大きい。雲種別の頻度からいえば、中層雲のことが断然多く、高層雲はその半分にしか達しない。

jet雲の典型的な場合が去る11月15日の朝6~7h頃に現われた。東京附近ではAcの帯(その幅は指4本位)が東西に、地平線から地平線にまたがり、松島附近では南の空にAcの帯が見られた。この時のjetは高度約12,000mにあり、風速約100knots、走向はENE(約80°)であった。この状況から判断するに、この朝のjet雲は東京から松島まで、一本に連らなっていたものと想像される。あるいはもっと西方にも伸びていたのかも知れないのであるが、資料がなくて分らない。それで、11月15日の朝、このようなjet雲らしいものを観測された方があったならば、その状況をお知らせできるようにお願い致したい。またカメラ愛好家で、この種の雲を写された方があったならば、なにとぞ、本誌のために御寄稿下さるよう。

ついでながらつけ加えると、最近アメリカでは、あの猛烈なトルネードの起る場所とjetとが関連があるらしく、これをトルネードの予報に利用しようとする試みがある。(編集部)